
内側と外側の俺

agohige

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

内側と外側の俺

【Nコード】

N4006A

【作者名】

agohige

【あらすじ】

今まで穏やかだったハズの俺が豹変してしまったように凶悪な人格へと変わっていった。

始まり

俺は沖縄のとある中学校に通う普通の中学三年生だ

だが、それは表面的に見ただけであり、内側の俺とは全く違う

別の人格らしきものが現れたのは小学三年生の時だった

俺はいつもの帰り道を歩いていると年老いて弱った猫がこちらへ向かってきた

俺は気になってその猫に近づいた

何故だか猫に触れた瞬間別の人格のようなものが現れて、猫の首を折った

折った瞬間俺は夢から覚めたような感じがした

そして地面に転がる猫の死体を見て、俺は怖くなって逃げ出した。

次に現れたのは小学校五年生の時だった

猫を殺した時の記憶は薄れてきていた。

だが、ある日の夜家の近くの広場にいた犬を俺はバットで殴り殺していた。

また夢から覚めるような感覚で目を覚ました俺は月の明かりに照らされた犬の死体とおびただしい血を見て半分泣きながら家へ帰った
不思議と猫を殺した時のように怖くはなかった

当然親には叱られた。

その日から俺は奇妙な物を集めるようになった

たとえばナイフやエアークンを親に隠しながら集めていた

時々カッターで自分の手首を切り、肉を切る感覚に溺れていた。

しかし中学校に入って親に見つかってしまい、俺の生きがいとも言える物を奪われてしまった。

• それからはしばらく普通の人間のように生活していたのだが……

再び・・・

中学校の課程を半分終えた中学2年の10月に俺は友人の彰彦と快と下校中、話をしながら歩いていた。

快が、

「コンビニ行こうぜ」

と、俺を誘った

まあやる事もなかったので俺は誘いを受けた。

漫画の立ち読みをしていたら彰彦と快は先に家に帰ると行っただけ俺は二人に別れを告げた。

漫画を読み終えて店を出ると、辺りはもう暗くなっていた。

急いで帰らないか、と思いき急いで家に帰ろうとした

その帰り道で俺は地面に銀に光る物を見つけた

それを見た瞬間、体の奥底に封印されていたまがましい感情がこみ上げてきた。

落ちていたものはナイフだった

それを手にとると、かつて動物達を殺した時の人格らしきものが解き放たれた感じがした。

俺はナイフを懐に隠し、周りに誰もいない事を確認すると急いで家に帰った。

その夜、机の上にあるナイフをずっと眺めていた

その銀に光るナイフは決して表に出してはいけない自分の内側の人格を映し出しているようだった

不思議とまた何かの衝動にかられて夜の町へ飛び出した。

広場へ行くと数匹の犬が群れをなしていた

俺はナイフを握り締め、犬の群れへと少しずつ近づいていった。

・・・気が付くと俺は血にぬれたナイフを握り締めたまま座り込んでいた

周りには円を描くように、そして頸動脈を真つ二つに切断された犬

の死体が転がっていた
その中心にいた俺は微かに笑っていた……。

次の日の朝、俺は何事もなかったかのように起きていつものように学校へ向かった

しかし、制服の内側のポケットには昨夜、犬の殺戮に使われたナイフを忍ばせていた。

昨日のできごとで人格が入れ替わってしまっていた。

今まで善の役割をしていた人格の俺は逆に内側へと引込まれ、悪の役割を果たす別の『俺』が外側へと出てしまった。

どうやら外側がやる事は内側からも見る事ができるらしい

だが、外側がやる事に干渉できないと言うことは動きを封じられたということだろう

問題はどうかしたら人格を入れ替えるかだ。

俺は外側の『俺』のやる事に注意しながら、その方法を考えた……。

死 『俺』編

昨夜、犬どもを皆殺しにした後、また「俺」が目覚めて俺はまた体の内側へ封じられるものだとばかり思っていたが今回はそれが無かった。

犬の死体の中心でしばらく考えていると（あまり頭は良くないが）俺はある考えにたどり着いた。

それは俺は完全に目覚めて「俺」がずっと眠ったまま、つまり内側にいた俺が覚醒し、内側に出て今度は逆に「俺」の方が内側へと閉じ込められた、という考えだ。

その考えが出たとき俺は確信にも似たようなものを感じ取った。

フフフ……そうに違いない。俺はやつと「体」と「自由」を手に入れた……。

俺は微かに、しかし他のヤツラから見れば恐ろしげな笑みをもらした……

翌日、俺は何食わぬ顔をして朝を迎える「俺」の通う中学校へ行った。

以前「俺」の内側から学校での生活を覗いていたことがあるので周囲に溶け込むのは簡単だった。

俺には人間の感情などと言うものは持ち合わせていない、ただ死への喜びとおぞましいほどの死への執着心はいつも体中に満ちている。自分で死を体験するのではなく、他の生物に俺が死を与えることによって俺は震え上がるほどの歓喜と死を実感した。

俺が他の生物に感じるのは絶対的な死だけだ。俺はそう思いながら懷に隠していたナイフを握り締めながら何事も無かったかのように学校で生活し、暗くなるのを待った。

今、内側にいる「俺」は気付いていないかもしれないが俺は「俺」の意識が無い間、犬や猫の他にも人を殺していた。今日俺は自由になった。

それは俺を止めるべき善の役割をしていた「俺」が内側へと閉じ込められ、俺はまた他の生き物を殺すことができる……。その日の夜、俺は誰にも気付かれないように夜道を歩いていた。今夜殺すべき人間を見つけたからだ。俺は初めて人間を殺したときのように静かにそして俊敏に殺す人間の背後へ近づいていった。そして……。

死「俺」 編

俺は目を覚ました。しかし眠った記憶が無い。

何故なのか考えていると、昨日の俺は『俺』に内側に封じ込められていた事を思い出し、全身を鏡に移し両手で顔をさすった。

よかった・・・俺は「俺」に戻れた・・・。しかし一体どうやって戻ったのだろう。

部屋から出て一階に降りながら考えていた。

不安に思いつつも家族の変わらない笑顔を見たら少しホッとした。

朝食をとりながら朝のニュースを見ていた。すると突然速報が入り、アナウンサーがその速報を報道した。

”・・・ただ今入りましたニュースによりますと、今朝3時頃、K中学校の体育館裏の崖下に全身を細かく切断された死体が発見されたようです。また、凶器と思われる刃渡り15cmほどのナイフが発見された模様です。警察では死因や身元の特定を急ぐと共に、凶器であるナイフに指紋が残されていないか調べていく方針のようです・・・”

ニュースが終わり俺の家族は全くひどい事をするものだ、と他人事のように話をしていた。だが、俺にとってはただの他人事では無かった。

ニュースで言っていた凶器のナイフとは、『俺』が再び目覚める原因となったナイフだったのだ。

俺は吐き気を覚えながら自分の部屋へ戻り、ある確信にも似たものをいだきながら自分の机を開いた。

そこには大小様々で、しかし、簡単に人を殺せるようなナイフが所狭しと並べられていた。

そして、そのナイフ達の上に白い紙に血塗られたような赤い色で十字架が描かれていた。

『・・・まだまだその十字架は増えていくぞ・・・。』

ぞつとするような声が聞こえた。その時初めて『俺』の声を聞いた。そう、この血塗られた十字架は『俺』の殺した犠牲者を指していた。そして俺は自分の両手を見つめた。

ほんの数時間前に人を殺していたと考えると、怖くてたまらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4006a/>

内側と外側の俺

2010年10月28日06時07分発行